
逢魔が時

琶華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

逢魔が時

【Nコード】

N9774Y

【作者名】

琶華

【あらすじ】

ルウの中には不思議が溢れていた。ルウが呟いた一言から始まるお話。「何故人は、在らぬものを信じ、在るものを当たり前とするのでしょうか」と。

背景が分からない、ぐだぐだとしたお話と呼べないお話。完全な自己満足且つ、意味不明な文章で御座います。

春の終わりの空は、鮮やかな紅や神秘的な菖蒲色、それにハツとする程綺麗な蒼色が幾重にも重なり、吸い込まれる様な美しさが出来上がっていた。白くうつすらと空に浮かぶ二つの月は、あと数時間もすれば白銀に輝くのであろう。

「何故人は、在らぬものを信じ、在るものを当たり前とするのでしょうか」

神様。ルウには、そうやって敬い、信仰する事の意味が分からなかった。

「ルウ。何故、人は神を拝める」

ルウの隣にいる人物は、黒のマントで身を包んでいる為、容貌は分からないが声音からして高齢の男性のようだった。

「狡猾な夢を、見ているのではないだろうか」

そつと呟いたルウに、男は不思議そうに聞き返す。

「夢？」

「少しの希望と、期待と、それに大きな保険の。言い訳の道具に使えるから、人は神や仙人をも利用しよう。そう思っているのでは、無いでしょうか」

宗教国と俗に言われるそれらの国の大半は、戦を神のお告げと称した。それは何よりも説得力があり、国民の大半は戦に否をあげるどころか、歓迎しているようにも見える。

「では何故、人は国王を敬う」

「人は、神様みたいに万能な力を持っている訳じゃない。それは、奴隷でも、貴族も同じ。けれど、敬うという行為が当たり前で、当たり前で成らなければいけないのだと、思います」

ルウの出身国は、身分制度がはつきりとした大きな国で、多くの作物が取れるが、殆どが貴族に吸い取られてしまふ。農民と貴族の間の壁が大きく高く聳え立ち、農民から成りあがる事が難しいのだ。

そして何故か、国王は絶対の存在であり、それがどうしてなのかと、疑問に思う事など無かった。

母が死ぬと、村人が総出で土を掘ってくれた。国王が死ぬと、国全体で盛大で豪華な葬式をあげて、翌年から約10年間程、その日には必ず追悼するようになった。その差は何なのだと。それがルウの不思議であつた。

「どうして当たり前で成らなければいけないんだ？」

「分かりません。けれど、国王という存在を無くすと、何か均等が崩れると思います」

「今の状態が均等を保っていると、言えるか？」

戦に明け暮れる大国。貧困に陥り、消えていく小国。

「いえ」

そうやって短く返事をしたルウは、何かを考えるように顎に手を添える。

「格式高い家柄に生まれた事が名誉だと、本気でそう思っている人がいます」

ルウが囁くように言うと、男は頷いた。

「家柄の善し悪しで将来が決まると言っても、過言では無い。それは何故か？」

「それを聞いているのです。どうして人は、平等ではないのですか？」

「成る程。——お前にはまだ早いよ。まだまだ……幼い」

ルウは何かを言いたげに男を見つめるが、先に男が口を開いた。

「考えが偏っていると、言いたんだ」

しゅん、と頭を垂れたルウの頭をぼんぼんとあやすように叩くとそつと呟く。

「お前が何故、考えが偏っているのか分かる日が来れば、もう一度話をしよう」

「……はい」

そう言つて、ルウと男はいつのまにか座っていた体を起こし、歩

き始めた。

この時期の移り変わりの早い空は目が奪われるような圧倒される美しい紫一色に染まりつつある。

二つの影の一方が、だんだんと空に染まるように薄くなり――
―消えた。

（後書き）

不思議な雰囲気味わう話が書きたかったのですが、やはり自己満足な……。
お粗末様でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9774y/>

逢魔が時

2011年11月29日15時45分発行